

連載「四字熟語の愉しみ」 web「円水社+」 <http://www.ensuisha.co.jp/plus/>

2019年1月～6月

2019年6月の「四字熟語の愉しみ」は

「銀海生花」「進寸退尺」「真相大白」「甘井先竭」
を書きました。

「銀海生花」（ぎんかいせいしか）20190605

「銀海生花」（蘇軾「雪后書北台壁 其二」から）というのは、反射的な光線を浴びた時に眼に見える花のことですから、だれでも経験していながら意識していない“わたしだけの花”のようです。「銀海」というのは唐代の道教の僧医であった孫真人の著『銀海精微』が眼科にかんする古典として知られて、いまでも眼科医むけの情報誌『銀海』が出ていますし、眼鏡の専門家を養成する日本眼鏡技術専門学校は銀海学園の経営ですから、「銀海」は眼あるいは眼科の意味合いで用いられている古語のようです。

宋の蘇軾の詩は「凍合玉楼寒起粟、光揺銀海眩生花」というもので、王安石も「道書には肩を玉楼となし目を銀海となす」と解説していますからリアルには肩や眼をいうのでしょうが、「銀海生花」を詠った蘇軾には玉楼も銀海も花もそれとして見えていたはず。ぎんぎんぎらぎらと夕日が沈む日本海でつかの間の「銀海生花」に出合った人もあるでしょう。「眼花繚乱」で色に眼まどうではなく、“わたしの花”をみてほしいのです。

「進寸退尺」（しんすんたいしゃく）20190612

一寸進んで一尺退くとなると、退き方が大きすぎるのでどうなるのでしょうか。一方に尺では短すぎて寸では長すぎるという言い方もありますから、そのあたりは気かけずに「進寸退尺」（『老子「六九章」』など）は、得るところ少なく失うところが多い場合に、古くから用いられてきたことばです。老子はこれこそが兵法で勝利する道だと説いています。唐の韓愈は、およそ二十年、薄命不幸で、ややもすれば讒謗にあい、「進寸退尺」ついに成るところなし、とみずからをはげましつつ採用を訴えています（上兵部李侍郎書）。

対しては「得寸進尺」（『戦国策「秦策三」』から）があつて、范曄は秦王に寸を得たのだからただちに尺へとすすめています。貪欲であることが勝利への道だというのです、たしかに優れた研究者としては満足しないこと、どこまでも貪欲であることは必要なことです。

高齢期の学者なら「進寸退尺」が実感でしょうし、国際協調から自国ファーストに向かう大国の思惑で逆風をあびて、日本経済が「進寸退尺」にならないことを祈るばかりです。

「真相大白」(しんそうだいはいく) 20190619

真相が完全に明らかになること、悪事なら露見することを「真相大白」(周而复『上海の早晨』など)とといいます。いまを時めく常用成語で事例にはこと欠きませんが、まずはホルムズ海峡での日本運航タンカーへの攻撃があります。アメリカとイランが犯人を押しつけあって実行者の姿が確かにならず、不明「真相大白」です。それよりも安倍首相がトランプ大統領の意向で動くことで、先人が培った平和国家の評価が脅かされかねないのです。

こんなことも。青森県八甲田のスキー場でだれかが樹氷にスプレーで「生日快乐(楽)」と落書きをした。連れの女性の誕生日を祝って喜んでもらおうとしたもので、このニュースが流れたとき日本人の多くはスキー客の中国人カップルのしわざと思ったというのです。のちに29歳のミャンマー人と知れて「真相大白」となったものの中国の旅行者にしこりを残したできごとでした。古くは「水落石出」といったようです。これですと経緯は次第に明らかになりますが、逆行「真相大白」というのが現代事情のようです。

「甘井先竭」(かんせいせんけつ) 20190626

コンビニにもスーパーにも500mlボトル詰め「おいしい水」が棚に並んでいます。栄養成分はみんな0.台で。各地の「名水」で泉眼からこんこんと沸き出る水は冷たくておいしくて甘い。訪れた人たちはそんな甘井が涸れることなど考えもしないでしょう。

荘子は「直木先伐、甘井先竭」(『「山木篇」』から)とといいます。木は用材にふさわしい素直な木から先ず伐られ、おいしい水の出る井戸は汲み取る人が多くなって枯渇してしまふ。八字を合わせて荘子は、才能や長所はそれがかえってわざわいになること。天年(天寿)を終える障碍にしないためには、材と不材の間にいることだということです。

唐の李白は士たるものは直木ならまず伐られてもしょうがないし、香木ならみずからを焼いて香を証すかしかない(直木忌先伐、芳蘭哀自焚「古詩古風五十九首之三十六」から)とといいます。世界各地からやってきた水を眺めながら、「甘井先竭」の人生を知ってな果敢に「直木先伐」を覚悟として生きる者がいることを思うのです。

2019年5月の「四字熟語の愉しみ」は

「春蘭秋菊」「凡桃俗李」「江郎才尽」「大手大脚」「游刃有余」
を書きました。

「春蘭秋菊」(しゅんらんしゅうぎく) 20190501

「平成」から「令和」への改元。青少年(～30成長期)や中年(～60成熟期)のみ

なさんは勢いづくでしょうが、4人にひとりの「高年世代（65～円熟期）」の人びとは、このままいまある社会で身を細めて過ごすのでしょうか。このたびの明仁天皇の生前退位は、政府の「ゴムひも伸ばし」の政策に「ノー」をいわれて、みずからの高齢期人生を確保されたもの。本稿は上皇としての期間を「令和（後平成）」期と呼び、「高年世代」が「自立」をすすめて存在感を示す「三世代平等化」のチャンスとして期待しています。

「退位礼正殿の儀」（4月30日）を終えた明仁天皇の最後のおことばは、象徴としてのつとめを「国民への深い信頼と敬愛をもって行い得たことは幸せでした」であり、「即位後朝見の儀」（5月1日）での徳仁新天皇のおことばは、上皇に学び「自己の研鑽に励むとともに常に国民を思い国民に寄り添う」でした。円熟期の上皇と成熟期の新天皇にはそれぞれに人生の春秋があります。「春蘭秋菊」（『楚辞「九歌・礼魂」』など）なのです。

「凡桃俗李」（ぼんとうぞくり）20190508

大地が温もった春に咲き、妍を争いあう桃や李の姿（李白桃紅）を、凡であり俗とみる「凡桃俗李」（王冕「題墨梅図」から）がいられます。そこから俗人のすることや平凡な事物や実績のない政治についてもいられます。元末明初の画家王冕（字は元章）の「凡桃俗李争芬芳、只有老梅心自常」が出典。氷雪の林中にいて一夜清らかな香りを発する白梅に出合った画家が、苦学した姿を思いつつ桃李を凡俗とみる立場には納得がいきます。

子どもの王冕が苦学するようすが小学生の教科書に「少年王冕」の話として載っています。貧農の子だった彼は、地主の牛の面倒をみながら村の学堂へいき、朗々と読み上げられる文章を記憶します。あるとき牛を忘れて帰って父に叩かれ、家を脱したかれは寺院にいき、仏像の膝に坐って灯明のあかりで借りてきた破れた本を読みました。結局、科挙には合格できず、各地を放浪して絵を画いてすごしました。王冕の画は日本にも伝わり、信長の父織田信秀が所蔵していた「墨梅図」が宮内庁三の丸尚蔵館に保存されています。

「江郎才尽」（こうろうさいじん）20190515

身近なスマホでも車でも、かつてナンバーワンといわれたものが衰退していく「江郎才尽」の感覚は、だれにもわかるのでよく使われます。

江郎は江淹（字は文通、444～505）のこと。南朝の宋、齊、梁の三代に仕えた文学者で、若いころは才気あふれる詩文を表して高い評価を得ていましたが、官をのぼり年をとるにつれて文思衰退して佳句を欠き趣きを失い、ついには枯渇して並みの詩文しか書けなくなって「江郎才尽」（『南史「江淹伝」』から）といわれました。いまなら認知症といわれるような病変によって起こる文思衰退を「江郎才尽」と名づけられて 当人

としてそれを知って耐えていた江郎自身の悲哀の深さがこのことばを残しているのでしょう。

もの書きばかりでなく、歌手にも、名作の映画化にもいわれ、テレビに出づっぱりのタレントに実例をみかけます。また文才ばかりでなく、サッカーの花形選手にも、ブランド製品の劣化や国際モーターショーでの日本車が「江郎才尽」と評されたりもします。

「大手大脚」(だいしゅだいきゃく) 20190522

手が大きく足が大きい「大手大脚」(曹雪芹『紅樓夢「五一」』など)といえ、およその察しがつくように、金遣いが荒い、派手に浪費する、節制を知らないことに。六つの財布からひっぺがしたお小遣いで何不自由なく育ったひとり娘はオヨメにもらうなというのが、裏でのささやきです。日本にきて化粧品のバク買いをする中国客にはこんな性向の女性が含まれているのでしょうか。では「小手小脚」がほめことばかというところではなく、こちらは気が小さくてまともにものごとができない、手足がうまく使えないことに。さらに「毛手毛脚」もあって、これは心がこもらない、沈着でないことにいいます。

「四体不勤」に暮らす都市住民や若者たちに対して、地方で子どもの学費や結婚費用のために辛苦して働く父母の手のひらは固く土色をしています。泰山をのぼる客の荷を担いで6000段の石段を登る挑山人の両肩には玉の汗が光っています。それを知る子どもは小額のお小遣いを貯蓄します。不況があたえる反省の時が中国に近づいています。

「游刃有余」(ゆうじんゆうよ) 20190529

「游刃有余」(『莊子「養生主」』から)は、庖丁(ほうてい、料理人)の技術がすぐれていて、身のこなしも手さばきも軽く牛刀をあやつりながら骨と肉をやすやすと切り分けていき(桑林之舞)、あとに余地が残ることに。そこから比喩として経験が豊富で熟練した技術や知識で問題を解決するのにむだな力を費さないことにいいます。

目の前で庖丁が実にやすやすと牛をさばいていくのに驚いて文惠君(梁の恵王)が聞きます。庖丁はこれは技ではなく道だといひます。牛の骨と肉のつき具合をよく知って本来の筋目に従い本来のからだのしくみに従って調理するので骨に当たることがない。

「腕のいい料理人でも年ごとに牛刀を替えるのは骨に当たるからで、わたしのは19年になり数千頭もの牛をさばいても研いだ後のように鋭利です」と答えます。「善きかな、言を聞いて生を養うを得たり」と恵王に言わしめています。日本がF3を買って「借鶏下蛋」をねらうのも、アメリカ市場で中国製品が歓迎されるのも、「游刃有余」の結果だといひます。

2019年4月の「四字熟語の愉しみ」は

「恵風和暢」「令月嘉辰」「風和日麗」「過門不入」

を書きました。

「恵風和暢」(けいふうわちょう) 20190403

新元号が「令和」と決まりました。選定者は漢籍でなく国書『万葉集』が典故であることを誇りとしましたが、実情からいえば漢籍と国書の双方を典故とすべきだったでしょう。

大宰府の自邸で、王羲之の蘭亭の宴に似せて梅見の宴を開いた大伴旅人が、『万葉集「巻五」』に載る「梅花歌三十二首并序」に「初春令月、気淑風和」の八字を記すにあたって、王羲之「蘭亭集序」の「天朗気清恵風和暢」と張衡「帰田賦」の「仲春令月、時和気清」を意識していて、前者からは「風和」を、後者からは「春令月」と「和気」とを得ており、後者は「令和」の典故でもありえます。それを知る提案者は、恒例である漢籍と国書を合わせて典拠とすることで、漢字文化圏の豊かさを示そうとしたことでしょう。

「風和」について。日本では「雪月花」ですが中国では「風花雪月」で、柔らかい風が人を温かくつつむ「恵風和暢」からの「風和」には書き手の教養が示されています。令月(二月)の東風に感じて白梅が開く大宰府天満宮の賑わいが想像されます。

「令月嘉辰」(れいげつかしん) 20190410

新元号の「令和」が大化(645年)から248番目で初めて国書『万葉集』から得たとし、令(よ)き大和民族の特性「国風」につなげた安倍首相の講話に対して、日中双方から漢字文化圏の広がり豊かさを削ぐべきでないとする意見が出ています。外来の優れたものを採り入れてより勝れたものにする特性をいえれば首相の令姿を示せたでしょう。

江戸期の契沖の『万葉代匠記』には『梅花歌三十二首并序』は王羲之『蘭亭集序』の筆法を模したもの、「初春令月、気淑風和」の八字は張衡「帰田賦」の「仲春令月、時和気清」から、「気淑」は杜審言の詩から、「鏡前之粉」は宋武帝女寿陽公主の梅花粧から、「松掛羅而傾蓋」は隋煬帝の詩に負うなどの指摘がなされています。それらを「和風」にするのが民族の特性といえるもの。「令月」にちなむ四字熟語に「令月嘉辰」(『大慈恩寺三蔵法師伝「巻九」』など)があつて、令月はいい月、嘉辰はいい日で、あわせて「吉日」をいいます。『和漢朗詠集「巻下・祝」』に「嘉辰令月歎無極」が見えます。

「風和日麗」(ふうわにちれい) 20190417

前回みたとおり「令和」の典拠になった『万葉集』(天平2年、730年)の「初春令月、気淑風和」の八字は、王羲之「蘭亭集序」の「天朗気清、恵風和暢」と『文選』にある張衡「帰田賦」の「仲春令月、時和気清」からの化用(借用)がいわれます。が、

もうひとつ唐代高宗のもとで文学の発展に寄与した宰相薛元超の「諫藩官丈内射生疏」の文中にある「時惟令月、景淑風和」が最もよく似た表現として指摘されます。当時、遣唐使が持ち来った新渡来の文献のなかからふさわしい表現として化用したことが想定されるのです。

日本語が「漢字かなカナROMA字混じり」であるように、外来の優れたものをなお勝れたものにする日本文化の「和風」の多重性こそが民族特性なのです。「和」の意味合いは「平和」「昭和」「大和」で異なるでしょうが、ここでは現憲法の国際的片務である「日本の平和」が最大の「和風」事業であることに思いをいたしつつ、改元の年の五月の風暖かく陽光明るい「風和日麗」（沈復『浮生六記「二巻」』など）の休日をご過ごすことに。

「過門不入」（かもんふにゅう）20190424

「門を過ぎて入らず」（『孟子「離婁下」』から）は、私事を忘れて公務第一にすごした禹の事跡に因む四字熟語です。家の前を三度通り過ぎたのに入らなかったという禹の「過門不入」は八年（『孟子「滕文公上」』から）とも一三年（『史記「夏本紀」』から）ともいわれます。ひたすら治水・利水のため各地をあまねく歩きまわり、「会稽で崩じた」とされて紹興市にはりっぱな禹廟が設けられています。そうして国づくりに専念した禹を讃えることばが「平成」の年号の原典とされる「地平天成」（『書経「大禹謨」』から）です。

「平成」の明仁天皇は平和を祈る「慰霊の旅」をひたすらつづけ、沖縄、広島、長崎をはじめ、サイパン、パラオ、フィリピンまで足を運ばれました。8月15日の「全国戦没者追悼式」には「戦陣に散り戦禍に倒れた人々に対し心からの追悼の意」を表しつつつけられ、最後の「誕生日会見」には「平成が戦争のない時代として終わろうとしている」ことに安堵されています。「平成」の平は平和の「平」そして「令和」の和は平和の「和」です。

2019年3月の「四字熟語の愉しみ」は

「開源節流」「千羊之皮」「大材小用」「臥薪嘗胆」
を書きました。

「開源節流」（かいげんせつりゅう）20190306

初めての100兆円新年度予算案が衆議院を通過しました。健全な財政のためには、『荀子「富国篇」』の説く、明主は「養其和、節其流、開其源」から「開源節流」がいわれます。財源を開拓して収入を増やし、支出を抑えて節約をするというのは千古不易

の富国のための要諦です。国家も企業も家庭も個人も、それぞれ「開源節流」に努めて事業や暮らしを安定させ、その上での協調「和」が平和な社会をつくっているのです。

企業では、鴻海とシャープ（夏普）が連携するに当たって、鴻海側が力説して求めたのが「開源節流」でした。4年余のあいだ粘り強く協調しながら交渉をし大功を立てたのが戴正呉社長で、鴻海の「徳川家康」と呼ばれているようです。政府が1月から導入した「国際観光旅客税」は、出国時に1000円を徴収するもので、27年ぶりの新税。渡航条件をゆるくしておいて、「雁過拔毛」（『児女英雄伝「第三一回」』など）をねらった財源探しの「開源節流」ですが、日本政府はここまでやるのかという評も聞こえます。

「千羊之皮」（せんようしひ）20190313

「千羊之皮は一狐之腋に如かず」（『史記「商君列伝」』など）といわれます。厳冬の寒気を防ぐ羊毛の外着「千羊之皮」に勝る「一狐之腋」というのは、狐の腋の下の白毛皮でつくった「狐裘」（こきゅう）のこと。白く美しくやわらかで最高の暖衣とされていました。この貴重な衣服は「一狐之腋」という四字熟語を残して絶えてしまったようです。

このことばが帝王から発せられると「千人の諾諾は一士の諤諤に如かず」の意味となり、諾々と従う千人の臣下は諤々と直言する一人の賢臣に及ばないという嘆きになります。その上でさらに「千金之裘は一狐之腋に非ず」と用いられて、国を治めるには優れた人物が数多く必要なのだという要望にもなるのです。諤々の論議も成果につながるからで、わが『太平記「一六」』には楠木正成が兵庫で出会った新田義貞にこぼした「衆愚の諤々たるは、一賢の唯々には如かず」とあります。これもまた機に臨んでの至言というべきでしょう。毛を刈られて丸裸にされた羊たちに配慮して「百羊之皮」もいわれます。

「大材小用」（だいざいしょうよう）20190320

大きな器材を小さな用途につかうことが「大材小用」（陸游『劔南詩稿「送辛幼安殿撰造朝」』など）で、才能ある人物を低い職務に用いる人材の不当な扱い方でよく用います。出典に引いた南宋の陸游の詩では辛棄疾（字が幼安）を取り上げています。『三国演義』では、「鳳雛・龐統」の大材ぶりを見誤って小用に扱った劉備の失敗談が語られます。

最近の例では、北京大学博士課程を卒業した学生が高校教師になったことが「大材小用」として話題になりました。8歳で小学校に入学して6年、初中3年、高中3年、大学4年、碩士（修士）3年、そして博士が3年で、本人の学術への専心さも、掛けた時間も費用も並みではありません。科学研究部門へという当然のルートを選ばず人材を育成する高中の教師の道を選んだことに一般の支持が得られず、「大材小用」とされているようです。日本が自衛を超えた能力のある世界最強のイージス艦を自衛のため投入し

たという意味でも「大材小用」がいわれます。批判のない「大材小用」は盆栽でしょうか。

「臥薪嘗胆」(がしんしょうたん) 20190327

平成最後の新大関となった貴景勝が3月27日の昇進伝達式での口上に「四字熟語」をつかうかどうか話題になりました。親方であった貴乃花は大関昇進のとき「不撓不屈」を、横綱のとき「不惜身命」で心境をのべていますし、若乃花は大関のとき「一意専心」、横綱のとき「堅忍不拔」でした。同部屋の貴ノ浪の大関昇進が「勇往邁進」でした。貴景勝には胸に刻んできた四字熟語があって、それが父親の一哉さんからいわれつづけて大事にしてきた「臥薪嘗胆」でしたが、口上では「武士道精神」にとどめたのでした。

いわれは春秋時代の呉越の争いで、敗れた呉の夫差が三年薪の上に臥して忘れず「会稽山」の戦いで越の勾踐を破ったこと、敗れた勾踐が二〇年胆を嘗めて忘れず「会稽之恥」をそそいだことから。元は復讐を成就するために刻苦したことからでしたが、のちに刻苦自励する四字熟語として「臥薪嘗胆」(蘇軾「擬孫權答曹操書」など)が広く用いられるようになりました。いわれのきびしさを知って貴景勝が避けたように推察されます。

2019年2月の「四字熟語の愉しみ」は

「春満人間」「冬日暖陽」「遊手好閑」「政出多門」
を書きました。

「春満人間」(しゅんまんじんかん) 20190206

「春満人間」(曾恐『元豊類稿「班春亭」』など)は、生き生きとした春の気配が人びとの間に満ち溢れるようす。春の気が足りないうちは、「筆下春風」や「筆頭生花」や「筆底春風」でもりたてます。そうこうするうちに「春暖花香」の季節がやってくるのです。今年の「春節」は2月5日で立春の翌日になりました。ですから3日の節分に恵方巻を食べ、4日の立春(除夕)には
年夜饭を食べて「春晚」(CCTV春節聯歡晚会)を見て、餃子を食べて祝った国際派の人もいたでしょう。「亥(猪・ブタ)年」の春節に、食品ロスの恵方巻を飼料としてたっぷり満喫した日本ブタたちもいたことでしょう。「春節」は農暦の正月初一ですが、なお大気は春めいてはおりません。新月で月影はなく星明かりだけの夜をすごして、農民は新しい年に豊作を祈り、無病息災を祈り、家族そろって「吉祥如意」をねがってきたのです。七連休を利用し海外旅行に出る人も多く日本各地は人気スポットです。景気減速で消費に変化がみられるようすが。

「冬日暖陽」(とうじつだんよう) 20190213

晩年を自在に過ごした唐の白居易は、その「自在」詩に「杲杲(こうこう)冬日光 明暖真可愛」と初句に述べて、ながいすを陽のあたるところに移して日だまりで一人語りをしています。が、「冬日之陽」は長く君王の人民に対する恩恵として専用されてきたために、自然のぬくもりを失っていました。解放された「冬日之陽」は、春節のころから本格的な「春暖花香」の訪れるまでをつなぐ「冬日暖陽」で語られるようになっていきます。

春節を迎えて郷里に帰る人びとを輸送する春運をスムーズにするために、中国標準規格の高速鉄道復興号が各地でフル運転されていますが、広州市では「冬日暖陽、花城有愛」をかかげて、志願者の若者たちが駅の整理に当たっています。同じころ南方の昆明では「冬日暖陽」の日々がつづいて、菜の花をはじめ樹状月季(中国バラ)や冬桜花や芳香万寿菊などの花々が咲きそろい、艶を争う「冬日春景」を現出しています。しかし北方ではまだ「春回大地」には遠く、「冬日暖陽」の日だまりを求める日々がつづくのです。

「遊手好閑」(ゆうしゅこうかん) 20190220

近ごろのテレビ番組にお笑いや料理・食べ歩きが多いことに気づきます。手を遊ばせて生産的なしごとから離れて安逸にすごすことが「遊手好閑」(『紅樓夢「六五回」』など)です。用いるのは口ばかり。口の用はしゃべることとたべること。それを見て一日を「遊手好閑」にすごすのは褒められたことではないようです、年季のはいった技術を巧みに使いこなす器用な人をいう「手八丁」は褒めことばで、「口八丁手八丁」となるとけなしの意味合いが強まるのですが、ここから先のことわざ検索は本項の手に余りません。

原稿を見ながら一時も手を休(閑)めずに鉛字を拾う「検字」(植字)は、停電でも「盲検」ができる神業として最高の「手芸」であり、「手芸人」として尊敬を受けてきました。が、電腦(コンピューター)の出現で一夜にして鉛字が廃れてしまい、「用武之地」を失った技術者は、少年でもできる電腦検字には関わらず、複雑な思いで「遊手好閑」の日々を受け入れています。労苦して身につける「手芸」の伝承は失われかねないのです。

「政出多門」(せいしゅつたもん) 20190227

「政出多門」はいろいろな部門が政策を出すことですから、民主主義の社会なら良い意味で用いられるところですが、「除く、避ける」ものとされていて事情は逆。理由は原意になった「政多門」(『左伝「襄公三十年」』から)が、大国にはさまれた陳国の君主が卿大夫らから出された政(政令)を領導できずに国を滅ぼしてしまったという故事か

らのため。一方に「政由己出」があって、己は項羽のこと。「政はおのれより出づ」として独断専行。章炳麟も『民報』を発禁にした内務大臣平田東助のやり方をこう評しています。

すでに採り上げた「群龍無首」(2018・8・15)は無首のため困った状態が想定されますが、これも逆。原意になった『周易「乾」』の「群龍無首」は、天徳による治世がおこなわれていたころには、優れた能力をもつ人物(龍)がたくさんいても互いに補いあってしごとをしていたので、とりたてて「首」とする人物を置く必要がなかったということです。

政治は常に表裏があるようです。さてこの国の「政」はどのあたりにあるのでしょうか。

2019年1月の「四字熟語の愉しみ」は

「頂天立地」「有志竟成」「彈冠相慶」「揚眉吐氣」「五味俱全」
を書きました。

「頂天立地」(ちょうてんりっち) 20190102

頭上は遮るものもない青天、両足はしっかりと大地を踏まえて立つ姿が「頂天立地」(釈普済『五灯会元「卷五六」』など)です。時代の潮流にあがらっても堂堂正正と大業をなしとげようとする気概非凡な人物をいいます。郭沫若は『屈原「第三幕」』で楚国の棟梁であり「頂天立地」の柱石である屈原の姿を描いています。

建造物ならデザインに古代の胴細な酒器である尊の形をとりいれて北京一の高さをめざすシティック・タワー(中国尊が名称。528m)でしょうか。わが国の長寿堅強のシンボルであり、八〇歳でエベレスト頂上に立ち、いま八五歳で南米最高峰アコンカグア(6961m)に挑む三浦雄一郎さんの姿に通じます。スポーツなら世界一を、ものづくりなら品質随一をめざすことに。わが途をゆき天下に愧じないことからテレビドラマや歌詞のタイトルにもなっています。天と地の間に人が入って地にふんばり天を押し上げる「立地擎天」があって、こちらは死力を尽くして艱難のきわみに耐える人物をいいます。

「有志竟成」(ゆうしきょうせい) 20190109

「有志竟成」(『後漢書「耿弇伝」』から)は、昨年ノーベル生理学・医学賞を受賞した本庶佑京都大学特別教授を支えつづけた座右の銘で、本庶さんは「志をしっかりしていれば、いつかは実現できる」と解説して、色紙に書いてノーベル博物館に寄贈しています。

「有志者事竟成」は、後漢時代に難敵であった斉を平らげた耿弇(こうえん)を光武帝劉秀が称賛した名言として知られ、のちにその故事から志を堅持して努力しつづけるこ

との重要性をいう四字熟語「有志竟成」になったもの。革命事業に十回失敗したといわれる孫文もこのことばに支えられ励まされたといえます。清華大学付属中学が順利（継続進展の標語）にしていますし、わが国の浜松市立北浜中学校が校訓としています。

京都大学は教授の名を冠した「本庶佑有志基金」を設立。基金は同賞の賞金（約1億1500万円を共同受賞者と折半）を原資に、成果をがん治療薬とした製薬企業（オプジーボ、小野薬品）からの特許料収入なども充てて、若手研究者を長期にわたって支援します。

「弾冠相慶」（だんかんそうけい） 20190116

自分と志を同じくする友人が高官に任命されたのをわがことのように喜ぶとともに、みずからの冠（帽子）の上の塵を弾いて任官の準備をするというのが「弾冠相慶」（『漢書「王吉伝」』から）です。故事のもとになったのは琅琊王氏の祖といわれる王吉（字は子陽）と貢禹で、「王陽在位、貢公弾冠」として知られています。知名人となった人物の周辺から人材が躍り出ることといわれ、中国に特有の人材登用のありかたとして用いられています。

それは一国主義のトランプがアメリカに登場してきたことで、ブラジルのトランプとしてボルソナールのような人物が熱狂のなかから躍り出ることにも通じます。ペンタゴン（五角大樓）が世界の局地戦から米兵を引いているのに対してロシア軍が「弾冠相慶」といった立場で躍り出ています。こんなときに北方領土問題でわが国の主張が通る状況にはないでしょう。球界でジャイアンツが優勝を目標に掲げて人材をあつめる一方で、生え抜きの選手を放出するといった手法もそのうちといえるのでしょう。

「揚眉吐氣」（ようびとき） 20190123

眉を揚げて気を吐くという「揚眉吐氣」（李白「与韓荊州書」など）は、長い悶々とした抑圧状態（忍気吞声）から解放されたあとの壮快で気分が昂った状態をいいます。若き日の李白が妻子を得て安陸にいたころ、荊州長史だった韓朝宗に送った自己推薦の手紙に「白揚眉吐氣，激昂青雲」と抱負の宏大さを誇って記しています。こういう解放状態は現代中国のあちこちに見られるので、李白の奔放さを気持ちよく重ねて用いられています。

国連の分担金（2019～21年）では、中国が12.01%に増えて日本の8.56%との差がはっきりしたことで、国際的地位の上昇として「揚眉吐氣」がいわれます。月面探査機、原子力潜水艦、国産車SUVの開発などでも。ただしサッカーのアジアカップではまずは1次リーグ突破で16強を目標にしてやれやれといった「揚眉吐氣」ですが。登山の三浦雄一郎さんは延期になりましたが、テニス豪州オープンで接戦に耐えて逆転勝利した大坂なおみ選手の喜びを爆発させた表情は「揚眉吐氣」そのものでした。

「五味俱全」(ごみぐぜん) 20190130

農暦の除夕(大晦日、今年は2月4日)の「年夜飯」(日本のおせち)の食材・料理の宣伝に「五味俱全」のキャッチは欠かせません。「五味」はご存じ酸(すっぱい)甜(あまい)苦(にがい)辣(からい)鹹(しおからい)で、すでに『礼記「礼運」』に「五味六和」として表れます。五味ともにそろう「五味俱全」(『関漢卿『竇娥冤「第二折」』など)は調理が五味の特徴を活かしていることに。山東料理は鹹、四川料理は辣、上海料理は甜といった地方色も生きています。中医では偏らない摂取が健康の元としています。

五味の多様な味わいから「五味俱全」や「人生五味」は本やTVドラマのタイトル、お酒の銘柄、相声(伝統話芸、漫才)の演しものとしてもよく知られています。わが国にはこんな「五味俱全」もあります。五人そろわないと「嵐」じゃないと20年つづいた男性アイドル・グループ「嵐」が活動休止を発表し、30代の女性ファンが騒いでいるようですが、「盛筵(宴)必散」もまた「人生五味」のうちなのです。